



沖縄八重山文化研究会会報

第 23 7 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
Tel. 〇九八―八八―二一五〇四三

第二三七回沖縄・八重山文化研究会は、二〇一三年九月一五日、県立芸大付属研究所内で開かれ、前田舟子氏（琉球大学国際沖縄研究所・研究支援員）が「八重山士族の官話稽古と久米村」と題して発表した。

八重山士族の官話稽古と久米村 ―八重山博物館蔵の家譜を中心に―

前田 舟子

一、はじめに
今回、八重山博物館蔵の家譜資料群の中から、特に近世琉球期（一六〇九〜一八七九）における八重山士族の官話稽古に関する記載を抽出し、その内容について発表を行った。
八重山士族の官話稽古に関して最も多い事例は、沖縄本島の久米村へ出張稽古に出かけて官話を学習するというものであった。他にも、八重山へ寄港した帰唐船（進

貢貿易を終えて那覇へ戻る進貢船）に乗船していた久米村学生から官話を習う事例もみられた。

本発表では、家譜に官話、唐言葉、唐話、唐人通話などと記載される官話稽古について、その学習の形態や様相を明らかにし、そこから八重山士族と久米村士族との関係、さらには八重山と久米村との関係について若干の考察を行った。以下、その内容についてまとめてみたい。

二、八重山士族の唐話学習の背景― 通詞／通事の養成

八重山士族が積極的に唐話稽古に勤しむ背景には、八重山へ漂流・漂着する異国船の対応があった。漂着する異国船がたとえ中国籍の船でなくとも、実際に八重山に漂着した阿蘭陀船のように、西洋の船であっても船内には唐人が乗っていた。そのため、八重山側では唐話を操る役人の養成を肝要事項としていた（「新城」23）。通詞役には、若女子などの若者から三人を選んで立てており、この場合の費用は所造作（地

方行政経費)であった。一方、自ら志願して唐話稽古を行う者は、自分造作(自費)によって行っていた。どちらにおいても、久米村士族に師事して直接稽古を受けることが定められていた。

三、学習の方法

家譜を見てみると、師事する相手としては、久米村士族と唐人(中国人)の二つに分類される。それぞれの学習場所は主に久米村と八重山に二分される。

師事する相手	学習場所	事例件数
久米村士族	久米村	27/42件
	八重山	5/42件
唐人	沖縄本島 (泊・天使館・下儀保村)	6/42件
	八重山	1(?) / 42件
	中国(福州など)	2/42件
	その他(与那国)	1/42件

*事例件数(42件)は、あくまで現段階(2013年9月)の調査における数値であり、完全ではない。

四、まとめ

(1) 唐話稽古の背景について
① 八重山側(学習側)

頻繁に発生する異国船の八重山漂着に対応するため、八重山側(蔵元)は士族らの唐話稽古を奨励していた。一方、学習者である八重山士族たちにとっては、久米村への官話出張稽古は星功(功績)を加算できる重要な機会であり、特に若文子などの身分の者たちが積極的に出張稽古を行っていた。また、八重山家譜には、八重山士族が実際に使用したとされる官話のテキストや漢字・漢文のテキストなどが収録されており、そこから八重山内でも独自に子弟教育が行われていたことが窺える。

② 久米村側(教授側)

久米村では、多くの若者が勤学として中国福州に渡り唐話・漢文などを学習していたため、彼らは基本的な官話の素養を身につけていた。八重山士族が師事した「通事親雲上」という肩書きの久米村士族は、いわば留学経験などを通してある一定の官話能力を有していた者たちであり、八重山側はそうした者たちを選定していたことが分かる。

また、久米村の若者たちは、中国留学を終えて帰国してもすぐには久米村の明倫堂や首里の国学で教授することは叶わなかつ

たが、それでも八重山へ寄港した際に八重山士族に官話を伝授する機会を与えられたことは、教育実習の場として貴重な経験になったであろう。

このように、学習者である八重山士族と教授者である久米村士族との間で、官話稽古の需要と供給の平衡がうまく保たれていないことが当時の時代状況としてあったのではないだろうか。

(2) 稽古内容について

主に、実践面を重視していた傾向が見取れる。たとえば、即時に唐人と交渉できるように、会話や交渉能力の訓練に力を注いでいた。その例として、沖縄本島や八重山に滞在する唐人に会話内容だけでなく、発音の指導も受けていた(唐人対談・官韻稽古)。

五、最後に

今回、発表後に八重山研究会のみなさまから、大変貴重なご教示を賜った。たとえば、「通事」の読み方・発音に関して、発音表では「つうじ」と読んでいたが、石垣では「通事」と書いて「とおじ」と発音する姓があり、そこから推測して、おそらく当時の役職である「通事」も「とおじ」ではないか、とご意見があった。これに関連して、鳩間島では「通事」を「トウー

「ゼー」と発音しており、同じ八重山諸島でも地域や場所によって読み方が異なるのご教示をいただいた。そこで今後は、家譜調査以外にも、実際に波照間島や竹富島、鳩間島などへも調査に赴き、「通事」という屋号を調べてみたいと思う。そうすることで、文字資料以外からも当時の八重山諸島における「通事制度」の実態や官話稽古をめぐる状況をより深く理解することができると感じた。ほかに、宮古島の「通事制度」や官話稽古に関する史料記載があると同だったので、それについても追って調査していきたいと思う。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった八重山研究会に対し、心より謝意を申し上げたい。

参考文献

- 新城敏男2013 「近世八重山土族の異国語習得」『年報月曜ゼミナール』第5号
- 瀬戸口律子2011 『琉球官話課本の研究』榕樹書林
- 高橋俊三2011 『琉球王国時代の初等教育』榕樹書林
- 高良倉吉1999 「近世八重山の唐通事に関する事例」『第七届中琉歴史関係国際学術 会議論文集』中琉文化経済協会

文化短信

豊漁祈り奉納角力

与那国久部良

航海安全や豊漁を祈願する金刀比羅神社が一月一二日、久部良のナーマ浜で行われた。あいにくの小雨模様となったものの、金刀比羅神社への参道となっている階段には今年も大漁旗が飾り付けられ、漁師たちは夜明け前の早朝から続々と参拝した。

久部良の金刀比羅信仰は、戦前の久部良でかつおぶし製造業を成功させた宮崎県出身の発田貞彦（一八九五〜一九七一年）が始めたものと言われ、与那国町漁協（中島勝治組合長）が毎年旧暦の一〇月一〇日に神事を行っている。

式典の後、奉納相撲が行われ、漁民や地域から集まった人たちは好取組に歓声を上げた。

第二九回八重山毎日文化賞

八重山研究や芸術文化の振興に顕著な業績を挙げた個人を表彰する第二九回八重山

毎日文化賞（八重山毎日新聞社主催）がこのほど決定、今年の正賞には新城島（パナリ）の歴史を後世に伝えるため研究や執筆に取り組んできた登野原武氏、八重山古典民謡の裾野拡大に力を注いできた宮良長久氏、特別賞に八重山上布の第一人者の平良蓉子氏を選ばれた。

種子取祭 竹富

ことしも島は祭り一色

国指定の重要無形民俗文化財・竹富島の「種子取祭（たなどうい）」の奉納芸能が一月二〇日から世持御嶽で始まり、島は祭り一色に包まれた。奉納芸能は「庭の芸能」と「舞台の芸能」に分けて行われ、初日の舞台は破座間村が演じ、狂言や舞踊など三二演目が繰り広げられた。会場には平日にもかかわらず郷友、観光客など島内外から大勢の観客が詰めかけ、終日演じられる奉納芸能を堪能した。

農作物の豊穰と島民の無病息災を祈願する種子取祭は一九七七年に国の重要無形民俗文化財に指定され、約六〇〇年の歴史を持つ。この日は早朝から神司や公民館役員らが同御嶽で神事を行った後、道歌を歌いながら世持御嶽に集い庭の芸能、続いて奉納芸能が披露された。

新刊紹介

ボーダーを生きる人達を活写

松田良孝著

『与那国台湾往来記』

「国境」に暮す人々

書き出しからカジキマグロの勇ましい突棒（つきんぼ）漁のさまが描かれ、読者をひきつける。与那国から台湾へ出稼ぎに出た彼はどのような人生を歩んできたのかと興味がわく。本書は、与那国の人々が台湾との間を往来してきた歴史を、体験者へのインタビューをもとに再構成したドキュメンタリーである。ライフストーリーを軸に、歴史的な資料をからませ、与那国と台湾の五〇年に及ぶ関わりを描き出したものである。躍動感のある文体、証言者への暖かい視線が、本書の語り手たちの人生をよりいきいきとさせ、個人的体験の背景にある歴史的事象への目配りが、本書を単なる聞き書きではなく、「国境」を越えた与那国と台湾の歴史を考えさせるものになっている。戦争や植民地統治時代を知らない読者にもぜひ読んで欲しい一書である。

著者の松田良孝氏は埼玉県出身、北海道十勝毎日新聞社の政経部記者を経て、一九九

三年から八重山毎日新聞記者。著書に『八重山の台湾人』『台湾疎開―「琉球難民」の一年一ヵ月』がある。二〇一〇年には日本新聞労連のジャーナリスト大賞を受賞。本会でも第二三一回（二〇一二年三月）の研究会で「八重山―台湾間の人・モノの往来において台湾東部の漁港、南方澳が果たした役割について」と題して報告している。カジキ漁や台湾西部の漁港・南方澳が果たした役割などについて話し、最後に、「日本統治時代の南方澳を知る沖縄関係者は減り続けており、南方澳にいた八重山の人びとの姿をリアルに描き出す作業は年々難しくなってきた」と「急務なのは、できるだけ多くの証言を聞きとっておくことである」と語った。まさに本書につながる発表であった。

本書は序章と8章、4本のコラムからなる。第1章「台湾へ」では、与那国から台湾に行き、カジキ漁に従事した男たちの話から書き起こされ、第2章「蘇澳南方の琉球人」では「真南方」と蘇澳南方の一角にあった「消えた琉球人集落」の様子が記される。第3章「新港」、第4章「基隆」、第5章「終戦」、第6章「戦後を生きる」、第7章「台湾、再び」、第8章「密貿易」と、二〇余名の体験記録をもとに、時代、生活、生き様が描き出される。戦前台湾に渡った人たちは、ある者は戦争で引き揚げたのち大阪でヤミ市を経験し、戦後再び台湾社寮島で漁をする。ある者は台湾に留用されて「沖縄華僑」と呼ばれ、戦後2年たつて与那国に戻ったものの密航して糸満へ向かう。一方で若い与那国の男たちは台湾と「密貿易」を行う。彼らの生活史を追いつながりながら、それを通して、与那国と台湾との歴史、特に蘇澳南方、基隆、新港という港町との関わりがみえてくる。

ここでは、人や物の移動を妨げるものとしての「国境」は意味を持たない。人と人とのつながりだけが、人を活かし、歴史を動かしていく。戦後の一時期、「密貿易」時代などとよばれたこともある与那国と台湾の関係は、むしろ、「国境」を意識せざるを得ない現代にこそ読み返してみる必要があるだろう。

（B6判、三七〇頁、発行＝南山舎、定価二四一五円）

次回のお知らせ

★今年もいろいろお世話になりました。みなさま、よいお年を御迎えください。

★来年は三月九日の予定です。時間・講師はおってお知らせします。